

南極地域観測資料について

日本学術会議南極特別委員会委員長

茅 誠 司

I G Y の一環としてわが国が参加した南極地域における観測事業は、最初に想像したものよりも遙かに大きいものとなつた。

一番初めには、南極まで船を雇う費用8,000万円が主なものと考えて大蔵省に交渉したが、それでもそんな巨額の金を使うことは困るといつて断わられた位である。しかるに、昭和32年12月現在までに費された金額は18億円に近いようである。これからもまだまだ費用が必要となつてくると思う。

そこで、このような大事業の結果として得られた資料を文部省で整理編集することとなり、それが予備観測、本観測を通じて逐次発刊される予定となつた。昨年11月から本年4月に及ぶ予備観測は、色々な意味で大成功であつた。特にわが国は南極についてきわめて貧弱な知識しか持つていなかつたにもかかわらず、人命に係わるような故障を起さなかつたことと、予定通り11名の越冬隊員を残すに十分な基地を作り、必要品を運搬し得たこととは、高く評価されるべきである。この間にあつて、隊員はそれぞれの専門の観測に鋭意従事して、電波を始めとして、非常に興味ある結果を得たのである。

また、現在本観測隊員は宗谷に乗つて一路南極に近づきつつあり、また越冬隊員11名もこれを待ちうけている最中である。この越冬隊の資料は相当膨大なものとなることが予想されるが、本観測隊員20名が基地に越冬するようになれば、本格的な観測資料が山と積まれるようになろう。

これらの資料をよく整理して、一刻も早く利用できるようにすることは、日本学術会議南極特別委員会の最も希望するところであつたが、今回文部省が本委員会と緊密に連絡して、「南極資料」の刊行に着手されたのは、まことに欣快に堪えないところである。

ここに「南極資料」の第1号が刊行されるに当つて、この事業遂行に当つて協力された国民の皆々様と、また文部省の関係各位に、厚く御礼を申し上げたい。

昭和32年12月